

ま え が き

本書は、アフリカとアジアの国々の農産物流通の実態を、政策や制度の変化に注目して明らかにしようとしたものである。ある国の農産物流通の実態は、その国がもつ独自の農業発展の歴史、時代ごとの農業政策、国内の市場構造、農業生産の実態など、多くの要因を背景として形成される。本書はこれらの要因の相互関係に注目しながら、地域研究の視点から開発途上国の農産物流通を理解しようと試みている。

事例研究の対象国は、アフリカから4カ国（ガーナ、ザンビア、エチオピア、タンザニア）とアジアから4カ国（中国、ベトナム、ミャンマー、インドネシア）の計8カ国である。これらの国々はいずれも、1980年代以降に政府介入型から自由主義型への政策転換を経験した。本書はこれらアフリカとアジアの国々の農産物流通部門の変遷を個別に分析するとともに、各国の経験を比較検討することを目的としている。同時にそのような分析を通して、世界的な経済自由化の流れを反映した開発途上国の農産物流通の実態を捉え直し、今後の研究の方向性を探ることを意図している。

本書は平成13年度および14年度にアジア経済研究所で実施された「開発途上国の農産物流通：アフリカとアジアの経験」研究会、および「アフリカとアジアの農産物流通」研究会の成果である。研究会では、荒木一視氏（山口大学）に日本および中国の事例について、また錦見浩司氏（アジア経済研究所）にカザフスタンの事例について報告していただいた。またアジア経済研究所の多くの同僚諸氏にはオブザーバーとして参加していただき、研究会での議論の深化に貢献していただいた。この場を借りて感謝申し上げたい。